

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：34206

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11587

研究課題名（和文）児童の発達段階に適合したボール運動領域（ゴール型）の技能の指導内容に関する研究

研究課題名（英文）Research on the content of the ball movement (goal type) skill suitable for the developmental stage of primary school students

研究代表者

深田 直宏（Fukada, Naohiro）

びわこ学院大学・教育福祉学部・准教授

研究者番号：00825010

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、小学校体育授業におけるボール運動系領域、特にゴール型を対象に、発達段階に適合した指導内容を、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編に例示された技能の指導内容を手掛かりに検討した。
その結果、小学校中学年及び高学年に例示された技能の指導内容は、概ね適切であること、高学年に例示された技能の指導内容のうち、「近くにいるフリーの味方にパスを出すこと」は、中学年で学習できる可能性があること、中学1・2年に例示された「ボールを持っている相手をマークすること」は、高学年児童に学習できる可能性があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2008年以降の小学校学習指導要領解説（以下、解説）では、ボール運動系領域の技能の指導内容が、スコープとシーケンスの観点から各学年段階に具体的に設定された。しかし、発達段階に適合する指導内容を特定するための実証的研究は、これまであまり進められてこなかった。
本研究は、解説に例示された技能の指導内容を手掛かりに、小学校の発達段階に適合した指導内容を明らかにした。本研究は、発達段階に適合した指導内容の設定に根拠を与えることができ、社会的に意義ある研究であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the teaching contents of ball movement in elementary school physical education classes, especially the goal type, in accordance with the developmental stages, using the teaching contents of skills exemplified in the Physical Education section of the Courses of Study for Elementary Schools as a clue.
As a result, we found that the content of teaching skills in the middle and upper grades of elementary school is generally appropriate, and that "passing to a nearby free teammate" can be taught in the middle grades, while "marking an opponent who has the ball" in the first and second grades of junior high school can be taught in the third and fourth grades. The results suggest that "marking an opponent who has the ball", which was shown in the first and second grades of junior high school, could be learned by upper graders.

研究分野：体育科教育学

キーワード：発達段階 指導内容 ボール運動系領域 ゴール型 知識及び技能

1．研究開始当初の背景

ボール運動系領域の体育授業では、指導内容が不明瞭であることが指摘されてきた（吉田、1997）。これは諸外国でも同様であった（鬼澤ら、2008）。そのような状況の中、イギリスでは「ゲーム理解のための指導法（Teaching Games for Understanding）」、また、アメリカでは戦術アプローチモデル（グリフィンら、1999）等の指導モデルが提案された。これらの指導モデルは直ちに日本に導入された（以下、戦術学習モデル）。戦術学習モデルは、我が国の要領におけるボール運動系領域に関して、二つの大きな影響を与えたと考えられる。第一に、ボール運動系領域の技能の指導内容に対する影響である。具体的に言えば、ボール運動系領域の技能の指導内容を、ボール操作の技能（on the ball skill）とボールを持たない動き（off the ball movement）に区分したことである。第二に、ボール運動系領域で取り上げる運動種目の分類論に対する影響である。具体的に言えば、運動種目が有する戦術の観点から、多数ある運動種目を、ゴール型、ネット型、ベースボール型に分類したことである。なお、これらのボール運動系領域の分類論に関する影響は、小学校3年生から高等学校3年生まで及んでいる。

さて、このように極めて大きな変更が加えられたボール運動系領域であるが、発達段階に適合する指導内容を特定するための実証的研究は、これまであまり進められてこなかった。先行研究としては、国立教育政策研究所(2018)による小学校学習指導要領実施状況調査の報告が見られる。この調査では、技能の指導内容に対し、通過率が報告された。しかし、実技テストについては、6年生が対象であったため、発達との関連で、明確にはされていない。

発達段階に適合する指導内容の特定に関して、申請者はこれまで、2つの研究を行ってきた。第一に、解説に例示されたボール運動の技能の指導内容の習得状況について検討してきた。具体的には、小学5-6年生を対象に、タグラグビーの授業を対象として実施した(深田ら、2013)。その結果、技能の習得状況に3つの傾向が確認された。第1に有意な向上が確認されたもの、第2に有意な向上の見られなかったもの、第3に単元開始直後から高い習得状況を維持し続けたもの、であった。これらの結果は、当該学年に例示された指導内容に関して、習得しやすいものと習得しにくいものがあることを示唆している。

第二に、解説に示された指導内容の発達段階に対する適切性について、小学校、中学校及び高等学校の教師を対象にして質問紙調査を行った(深田ら、2016)。その結果、解説に示された学年段階と教師が適切と考える学年段階は一致しない指導内容があることが確認された。

以上から、解説に例示された指導内容の中には、児童の発達段階と適合していない内容がある可能性が示唆された。要領上では、ボール運動系領域はスコープとシーケンスの観点から構成されているが、実証的研究を進めることにより、児童の発達段階に対し妥当な指導内容の配列が提案できると考えた。

2．研究の目的

本研究の目的は、小学校3年生から6年生児童を対象に、ボール運動系領域(ゴール型)の授業を実施し、学年ごとに指導内容の習得状況を分析し、児童の発達段階に適合した指導内容を実証的に明らかにすることであった。

3．研究の方法

3.1 分析対象児童

A県B小学校の3年生2クラス、4年生2クラス、5年生2クラス、6年生2クラスを対象とした。単元は

ゴール型ゲーム(侵入型)であった。

3.2 単元計画

3年生及び4年生の各1クラスは中学年の指導内容を位置付けた授業を行った。また、3年生及び4年生のもう1クラスには、単元後半に発展的な学習として、高学年の指導内容を位置付けた授業を行った(表1及び表2参照)。5年生及び6年生の各1クラスは高学年の指導内容を位置付けた授業を行った。また、5年生及び6年生のもう1クラスには、単元後半に発展的な学習として、中学1・2年の指導内容を位置付けた授業を行った(表3及び表4参照)。

分析に関しては、1時間目、5時間目、及び9時間目のゲーム場面を設定した分析カテゴリーに従って分析した。

表1 中学年の指導内容を位置付けた単元計画

オリエンテーション	ステップ1(3・4年の指導内容)			大会	ステップ2(3・4年の指導内容の習熟)			大会
	2	3	4		6	7	8	
オリエンテーション チーム編成等 試しのゲーム	○パス& シュート ・ディフェ ンスなし	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○どんどん パスゲーム ・ディフェ ンスあり	大会	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○どんどん パスゲーム ・ディフェ ンスあり	大会
○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人	○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備者2人			○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人	○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備者2人			○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人

表2 単元後半に高学年の指導内容を位置付けた単元計画

オリエンテーション	ステップ1(3・4年の指導内容)			大会	ステップ2(5・6年の指導内容)			大会
	2	3	4		6	7	8	
オリエンテーション チーム編成等 試しのゲーム	○パス& シュート ・ディフェ ンスなし	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○どんどん パスゲーム ・ディフェ ンスあり	大会	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○2対1ゲー ム ・攻撃者2人 対守備者1 人	○どんどん パスゲーム ・ディフェ ンスあり	大会
○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人	○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備者2人			○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人	○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備者2人			○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人

表1 中学年の指導内容を位置付けた単元計画

オリエンテーション	ステップ1(3・4年の指導内容)			大会	ステップ2(3・4年の指導内容の習熟)			大会
	2	3	4		6	7	8	
オリエンテーション チーム編成等 試しのゲーム	○パス& シュート ・ディフェ ンスなし	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○どんどん パスゲーム ・ディフェ ンスあり	大会	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○どんどん パスゲーム ・ディフェ ンスあり	大会
○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人	○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備者2人			○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人	○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備者2人			○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人

表2 単元後半に高学年の指導内容を位置付けた単元計画

オリエンテーション	ステップ1(3・4年の指導内容)			大会	ステップ2(5・6年の指導内容)			大会
	2	3	4		6	7	8	
オリエンテーション チーム編成等 試しのゲーム	○パス& シュート ・ディフェ ンスなし	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○どんどん パスゲーム ・ディフェ ンスあり	大会	○パス& シュート ・ディフェ ンスあり	○2対1ゲー ム ・攻撃者2人 対守備者1 人	○どんどん パスゲーム ・ディフェ ンスあり	大会
○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人	○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備者2人			○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人	○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備者2人			○ハーフコートゲーム [ゲーム人数] ・攻撃者3人对守備 者2人

3.3 データ処理

得られたデータに関して、以下の手続きに従って処理を行った。

3.3.1 通過率

国立教育政策研究所(2018)は、2013 年度に実施した学習指導要領実施状況調査において、児童生徒の運動領域に関する学習の実現状況を通過率で検討した。これを踏まえて、本研究において通過率を用い、各クラスにおける通過率を算出した。

3.3.2 平均出現数

1 時間目、5 時間目、及び 9 時間目のゲームにおける平均出現数を比較した。4 つのクラス毎に一要因分散分析及び多重比較検定を行った。統計処理は、SPSS Statistics 27(IBM 社製)を使用し、有意水準は 5%未満に設定した。

3.3.3 通過率評価及び平均出現数評価

指導が適切と評価される学年段階を、技能に関する学習の実現状況を分析する観点から通過率を指標として設定し評価した。また、児童個々人の技能向上を分析する観点から平均出現数を指標として設定し評価した。

第一に、1 時間目、5 時間目、及び 9 時間目のゲームの通過率について、(a)1 時間目の通過率が 80%以上を示した指導内容は高学年より低い学年段階に適切、(b)1 時間目の通過率が 80%未満かつ 5 時間目もしくは 9 時間目の通過率が 80%以上を示した指導内容は高学年に適切、及び(c)1 時間目の通過率が 80%未満かつ 5 時間目及び 9 時間目の通過率が 80%未満を示した指導内容は高学年より高い学年段階に適切と評価した。

第二に、平均出現数について、1 時間目、5 時間目、及び 9 時間目のゲームの平均出現数に関して、一要因分散分析及び多重比較検定を行った。その結果を用いて、(ア)1 時間目に対して 5 時間目もしくは 9 時間目が有意に向上した指導内容は高学年に適切、及び(イ)1 時間目に対して 5 時間目もしくは 9 時間目が有意に向上しなかった指導内容は高学年に適切でないとして評価した。

4. 研究成果

研究の結果、小学校 3 年生から 6 年生の発達段階に適した指導内容として、以下の諸点が明らかにされた。

1. 中学年の指導内容である「ボールを持ったときにゴールに体を向けること」について、中学年段階では既に身に付けている可能性の高い内容であった。
2. 中学年の指導内容である「味方にボールを手渡したり、パスを出したり、シュートをしたり、ゴールにボールを持ち込んだりすること」について、中学年段階では既に身に付けている可能性の高い内容であった。
3. 中学年の指導内容である「ボール保持者と自分の間に守る者がいない空間に移動すること」について、中学年段階では既に身に付けている可能性の高い内容であった。
4. 高学年の指導内容として設定されている「ボール保持者と自己の間に守備者が入らないように移動すること」、「相手に捕られない位置でドリブルをすること」、及び「ボール保持者とゴールの間に体を入れて守備をすること」は、高学年段階に適切と示唆された。
5. 中学 1・2 年の指導内容として設定されている「ボールを持っている相手をマークすること」は、高学年段階に適切と示唆された。なお、高学年の指導内容として設定されている「近くにいるフリーの味方にパスを出すこと」及び「得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどをすること」は、中学年段階以下に適切と示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 深田直宏, 大友智, 吉井健人	4. 巻 38
2. 論文標題 小学校体育科5・6年生における技能の指導内容の検討: ボール運動系領域におけるゴール型(侵入型)に焦点を当てて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都滋質体育学研究	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 深田直宏, 大友智, 吉井健人	4. 巻 39
2. 論文標題 小学校体育科3・4年生におけるゴール型ゲーム(侵入型)の技能の指導内容の検討: 通過率及び出現率の分析を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 体育科教育学研究	6. 最初と最後の頁 31-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11243/jsppe.39.1_31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 深田直宏, 大友智, 吉井健人, 宮尾夏姫	4. 巻 7号
2. 論文標題 小学校5年生を対象とした体育授業におけるタグラグビーの技術の学習可能性に関する研究: 児童の技能水準に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館教職教育研究	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Naohiro FUKADA, Satoshi OTOMO, Takehito YOSHII, Natsuki MIYAO
2. 発表標題 Study on the possibility to acquire tag rugby's motor skills in sixthgrade elementary school PE classes: A focus for differences based on children's skill level
3. 学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 深田直宏、大友智、吉井健人、宮尾夏姫
2. 発表標題 ゴール型ゲームにおける技能の指導内容の検討 : 3年生及び5年生を対象にして
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第40回学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 FUKADA Naohiro, OTOMO Satoshi, YOSHII Takehito, MIYAO Natsuki, TSUKIDA Naoaki
2. 発表標題 A study on the learnability of motor skills in tag rugby for a 5th-grade elementary school physical education class: Focusing on the differences based on children's skill levels and gender
3. 学会等名 The 2019 International Conference for the 8th East Asian Alliance of Sport Pedagogy (Waseda UNIV.) (国際学会) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	大友 智 (Otomo Satoshi) (90243740)	立命館大学・スポーツ健康科学部・教授 (34315)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	吉井 健人 (Yoshii Takehito) (80850966)	育英大学・教育学部・准教授 (32311)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------